



新式
連歌
新式
増補
上

伊地知文庫
文庫20
127
1



文庫20
127
1

連歌新式抄上

伊地知氏書冊



連歌新式

後普光園拈取作始拾ひし二條殿
や良基と申すゆかり古相圖と申すや

又急りりきまを白返九十二年を建治
より已上二百八十九年を

追加 後常恩寺
ぬき加ふ

や一条太閤なり并

新式今案末

宵柏の又之加給へ
おまわりさ等

あつ紙をもちと記書加て
是也と名をいしなり

韻字事

句のときり
の字なり 物名

知々の字同
之代准之

クニ言時ぬたそくれぬびの事といふる事
クニも時ぬもこれ言の名及の名なり

思別は所をたしこころす宗願の結を以て
よまれたる時を推考しそと今入

与詞字

不嫌之

うやうやして形式之時ぬの言葉おしとてまうたにこれ
なれおしとのことなぬの字のまうとてまうたにこれ

物名と物名可煇打越

物名は其のまうたにこれ
又おしとてまうたにこれ

ぬの字のまうたにこれ二句
煇おしとて追加なり

詞字はくまうたにこれ

して

如けの形可煇
お越化准之

式字を代敷句の介

新くひくれとて或一周之はおおふ可

用之新くひくれ懐紙を多くて可用之

宵栢
今業

輪廻之味

生死輪廻の味お越へ
久系はまうたにこれ

薫と云

句よこつらうや付て又のまうたにこれ

へうすおはけていそを付て

うらうとていふ字のうらうや

たご物と云
句よこつらう

付るまぬひのまうたにこれ

付てまうたにこれ又おおと付るしおおのまうたにこれ

付るまぬのまうたにこれ又付れいお越へつらうとて

て又は茶焼かしく藪の形とふ付

化准燭
之

この句に風も霞も付て又不可

付之數句をくくつとつあこもくたの

増之此准 假令きたるつとつあこもくたの

に付る半なり但南世付る句ありらるんは

別のもれも 花よ風霞乃新付る半を

強不及沙汰用い 若程可守新式を

是宵今之句ありのゆゑに不付とつあこもくたの

竹の三句句よ世に付て又花乃字不

之如け新又を編廻や 竹のよとつあ

よ世に付て又別の初よ竹よ花の字不付て是の

世又花かゝる竹と付て花よ松かゝる付て

事 合よする半なり 三句よまゝこゝへ

中後物 花よ世のうらもあつる句に

付て又まゝにたりたりりのをとつる三句よ

ト

ト

三句つゝうらゝと今もくゝ人の言はれぬをあれん
又そのうらゝは昔もさうなりとて後世も昔もさや
いふんさうとさやいふんは昔もはてしなくさうさ
是にけりあかりと玉後世も同じ古事なりといふ
三句つゝうらゝとさやさうそれ別古事にては
とつゝうらゝとさやさうそれ別古事にては
昔も物言ひとて三句はけりさうさ源氏にては
また源氏の公さうもさうさうさうさうさ
さうのさうさうさうさうさうさうさうさうさ
つゝ袖とさうさうさうさうさうさうさうさ
さうにてはけりさうさうさうさうさうさうさ
さうのさうさうさうさうさうさうさうさうさ
わいさうさうさうさうさうさうさうさうさ
くゝのさうさうさうさうさうさうさうさうさ

九新古今已才集の他者不可用也

至續後撰集可用 是ハ中の方集や古今後撰拾
中の方より由又衣冠 造令集詞苑子載新古今是ハ
八代集並ハ八代集は二代さうさうさうさうさ
續後撰とれ十代集なりさうさうさうさうさ

中の方集川院百首作共さうさうさ

全案より二十年計あはれ末の集は全
可集との公かりは作共の撰集より下ハ

ともも可用なり為森 隆為を代作共の院方
為氏の類もてを周

は可用之 中の方より公かりは作共の撰集より下ハ
や院方のさうさうさうさうさうさうさ

上
下

つお神よ時をよまふは西にいてもを遠く
てもお念のしとたお念はしとて
わをうーたのちよお神のりりれ時を
それをよりぬ句としても平句はくも
都をちとく一句よする紙花よと
あ白よお神をうまよゆとて付る
のお神にわとて後さうとて川ぬ
わをうーしてはわとていれぬ
わら 堀川院友な乃作者迄 船渡入を
代集可為女哥之例 十人して百
わりの上お首のむかトニお首
集日は入るともが女よわら
の女代集はよわらとて代集の
る不可わ女とてお平のいれぬ
は川院の末の集よ入た 他人の
女首よわらわら 他人のわら
方とて付合よ不可好之依集可
用代哥也 人のつれもつれ
さる方とていせぬとて代集
あといきとて方のむわら
つてはあわとてわらつてわら
中あらる集可わお別集
心 後集之入をわら 人の代と
のり後へてこころは天
の代とわらつたの代

つお神よ時をよまふは西にいてもを遠く
てもお念のしとたお念はしとて
わをうーたのちよお神のりりれ時を
それをよりぬ句としても平句はくも
都をちとく一句よする紙花よと
あ白よお神をうまよゆとて付る
のお神にわとて後さうとて川ぬ
わをうーしてはわとていれぬ
わら 堀川院友な乃作者迄 船渡入を
代集可為女哥之例 十人して百
わりの上お首のむかトニお首
集日は入るともが女よわら
の女代集はよわらとて代集の
る不可わ女とてお平のいれぬ
は川院の末の集よ入た 他人の
女首よわらわら 他人のわら
方とて付合よ不可好之依集可
用代哥也 人のつれもつれ
さる方とていせぬとて代集
あといきとて方のむわら
つてはあわとてわらつてわら
中あらる集可わお別集
心 後集之入をわら 人の代と
のり後へてこころは天
の代とわらつたの代

なりおはき長夜と申しありは又先づ極たりは後
奈良院たりと申し半あり後法大寺たりとて
つけたりありのしの源大寺とてより半とて
院良基と申しありなりを字の字をわけてはと
いふほどの源氏物語は大部の物なるべし

三句とて一但同記の二句計とて

とて 雖有以説不慮幾也用中奇用古事 條
重なり可有斟酌況於同物語字

のとい月と一のむしてさへありたりとて二句も
一ある二句用たり三句不用あり源氏のむして
なりけきとも源氏を付りては二句も源氏のむ
なりたるはれは二句も源氏のむなり

付て又それ源氏付たりとて 赤紙よ
源氏われともなり 秘伝紙より用り
雜物射周事 不限水邊何
いも源氏

仍令去々云句は弓と付て入り
いふふをいとして付て不付是用なり
右や中末といふ可付是射たる也
や 仍令のむりりして射のむしを
いふとていふをいふとていふとて
分るんそいふまひくうとていふ不付射紙
いふむりり射たりありたりあり

をすれと合ふる可付らん、池なり、午未月、
自終つるなりたる、午未月、付く、法交るく
ある、
説き、ちいへ、
又不可終

申す、ちいへ、申す、
なり、ゆへ、なり

申す、
なり、ゆへ、なり

繩と付て、又繩か、是と不付、
かり、あ、かり、ら、あ、ひく、わ、
是、用、也

物の、繩、を、か、し、と、云、の、一、繩、を、か、し、と、云、
なり、ゆへ、なり、ゆへ、なり、ゆへ、なり

ひく、わ、
る、の、付、く、ら、あ、り、ゆへ、なり

一層一句物 百韻、なり

終、^{ワシカニ} _{ケルキモノ} 一隅を物都為一層一句物 云

自餘准之 論語、一隅而不以三隅、一隅とあり、
反則不復也、
百物とあり

自餘准之、
一層一句物、
終、
論語、一隅而不以三隅、
反則不復也、
百物とあり

六月のついで七月の中は時をまじや八月にせぬふり
世をわかくの時をわたり九月十月をわたり時を
お月めしよの時をわたりみよれわしはわたりきて十月
の雪のふりお月をわたりはわたりくよりくはわたり
ついでわたりお月をわたりはわたりはわたりはわたり
もよこし一はわたり十月よりよりよりよりよりより
一

五 二句物 但を年か ぬりりののほくひとくわたりを
のほくひとくわたり

七 但宗牧のせし結一こわりあさひのついで
のよよるるをわたりはわたりはわたりはわたりはわたり

八 二句物 ぬりりののほくひとくわたりを
ぬりりののほくひとくわたり

九 二句物 ぬりりののほくひとくわたりを
ぬりりののほくひとくわたり

十 二句物 ぬりりののほくひとくわたりを
ぬりりののほくひとくわたり

十一 二句物 ぬりりののほくひとくわたりを
ぬりりののほくひとくわたり

十二 二句物 ぬりりののほくひとくわたりを
ぬりりののほくひとくわたり

十三 二句物 ぬりりののほくひとくわたりを
ぬりりののほくひとくわたり

十四 二句物 ぬりりののほくひとくわたりを
ぬりりののほくひとくわたり

十五 二句物 ぬりりののほくひとくわたりを
ぬりりののほくひとくわたり

十六 二句物 ぬりりののほくひとくわたりを
ぬりりののほくひとくわたり

十七 二句物 ぬりりののほくひとくわたりを
ぬりりののほくひとくわたり

十八 二句物 ぬりりののほくひとくわたりを
ぬりりののほくひとくわたり

十九 二句物 ぬりりののほくひとくわたりを
ぬりりののほくひとくわたり

晋を代
二剛之
つるのろせきのかこの文字入て
二剛之
ハ三川ありて
枯風

枯風
日は
是もの文字入て
三の

あふてつる
白紙の中をかり
五月ぬ
三梅雨五月ぬの時

あふてつる
五月ぬ
三梅雨五月ぬの時

あふてつる
五月ぬ
三梅雨五月ぬの時

あふてつる
五月ぬ
三梅雨五月ぬの時

あふてつる
五月ぬ
三梅雨五月ぬの時

怨

合々二様より
三

あふてつる
五月ぬ
三梅雨五月ぬの時

あふてつる
五月ぬ
三梅雨五月ぬの時

あふてつる
五月ぬ
三梅雨五月ぬの時

あふてつる
五月ぬ
三梅雨五月ぬの時

あふてつる
五月ぬ
三梅雨五月ぬの時

あふてつる
五月ぬ
三梅雨五月ぬの時

あふてつる
五月ぬ
三梅雨五月ぬの時

あふてつる
五月ぬ
三梅雨五月ぬの時

夕

三

あふてつる
五月ぬ
三梅雨五月ぬの時

あふてつる
五月ぬ
三梅雨五月ぬの時

あふてつる
五月ぬ
三梅雨五月ぬの時

あふてつる
五月ぬ
三梅雨五月ぬの時

あふてつる
五月ぬ
三梅雨五月ぬの時

あふてつる
五月ぬ
三梅雨五月ぬの時

あふてつる
五月ぬ
三梅雨五月ぬの時

あふてつる
五月ぬ
三梅雨五月ぬの時

あふてつる
五月ぬ
三梅雨五月ぬの時

あふてつる
五月ぬ
三梅雨五月ぬの時

かり之呼 居

其一秋一徳居也

秋つらり

秋なり秋なりと云ふ事ありて事と云ふ所の言の言はれり

かして事なきと云ふ事あり秋なり秋なりといふ秋あり

のりて事なきといふ事あり秋のりあり秋のりありて

後 其一 公のなるる

後字

其一ひなをた

後ひひの字

命

其一ひのり

命述べ懐のりて又述べ懐

て又ひひのりちかく玉のと命なり

老

か

老の老の字軍のりちかく玉のと命なり

軍以後居る

男

か

の字のりちかく玉のと命なり

佐保

橋姫之類

如は三ひひの懐

非

一ひひのりちかく玉のと命なり

へわれひひのりちかく玉のと命なり

の相違ひひのりちかく玉のと命なり

りりして七夜のお布とぬびひひひひ

つゝほふふありてそそ結まは結まらばて共ぬれ共
ふのぬれをそそあつりけりさじしあふささささ
りマの方と縁てささささささ又今のつゝもあ
結りてあつりされり月を縁けりささあ
れれ物後より大略のいれささいりてささ
さ結ひあつりすさそそ結つさささささ結を
つゝささ結さ **女**よ夕り ささりよあつり又けよ
山神やり ささささささ
又上の句のささりよあつりて下の句のささ
ささりよあつりささ

上句のささりよあつり又中よさささささささ
下句のささりよあつりさささささささ
よあつりささささささささささ **の**た
あつりささささささ **の**た

如は詞とさささ **如**は詞とささ上下のささ
さささ二句なり ささつて二句あつりささ
中あつりささささ二の **如** さささささ
ささささささ **如** さささささ
ら **み** **ら** **さ** **む** 但不及ら替や

如は詞とさささ **如**は詞とささ上下のささ
さささ二句なり ささつて二句あつりささ
中あつりささささ二の **如** さささささ
ささささささ **如** さささささ
ら **み** **ら** **さ** **む** 但不及ら替や
初時あつりささ **如** さささささ
月よ結ひてもささ **如** さささささ
おれさ **如** さささささ
つゝさ **如** さささささ

半ちかりと海名ふ又いふ一とて河にまこのり
それとちうてふ一袖のうと涙のうとちや
庭のうと又あふと庭のたまり水の半ちり海
若 ワタツミ 蒼海 海底

遊色 小野 一可為 小野の半と島小野
名処 名ふのとれとあり

朝 二朝とてついで一
のさる二のさわり 垣 二うと海とつひうとと
あり非垣のうと非居ふ

二のほらちうて又あふと一とまうとち垣ちり
うとまのまうとちちちりうとあふとち

竹 鳥一鳥竹一うりれまうと居ふ
二句可隔やまうとたよゆと半之 約 二と
地准之 恋 二と

遊色 別恋 各二句
地准之 恋 二と

ち 二と 日 二と 半 二と ち 二と ち 二と ち 二と

の 二と 詞 二と ち 二と ち 二と ち 二と

ち 二と ち 二と ち 二と ち 二と ち 二と

の 二と ち 二と ち 二と ち 二と ち 二と

ち 二と ち 二と ち 二と ち 二と ち 二と

ち 二と ち 二と ち 二と ち 二と ち 二と

ち 二と ち 二と ち 二と ち 二と ち 二と

かすり紙

くじは二只縁一かきめりれやてたし
ぬの半よりたるも二の底に眺

幽視

源

多の和よな一紙一
わさし一

一産三句物

春月

只一産一 巳上三也 伝家指いされ月と
二ヶ月一

とかりりきるぬる月しりふゆえんてんさかりたさ
てよ一産三句のわよ出一しるるん三日月もさつしん

夏月

月お

冬月

日暮るるの秋の卯よ二日月
は四季の仲よ只一の縁えんぬ

三日月の今月三日月の今月三日月の今月三日月の今月

あまの紙のわしつしつしつしつしつしつしつしつしつ

種

只一紙一代一 只一紙一代のうみ一紙種も天竺
名種一 志種 天海種 すまゝの種を

いふふわたり名種はてや一三川の月六海よま
と種わしつしつしつしつしつしつしつしつしつ

花

可替懐美の細抽のむいおからへ一を年高
四句の物余はあふし一其内も紙とつふ

ても四句のうらかりはもかりては様場しむのむ
細抽むのあふし可ぬのうし由もさし法物む

念念年所論四句と句たは可ぬもさし細むりし
む三句してもさしむらむを今るれいささけ

うり一四くは地さますらん機と西はし場由念念
なるの何の事えしむあのかしとさるあのかし

いおなりくまらむむむまらぬれそのみらたトわりのらの
のしりわくすまよののしりもももみらのうらわたり

落葉

一松のねしん一落葉も葉口申す柳
らるれと一葉うりても一ちりね乃

ねしん竹のねしん葉難之柏のねしんねしん葉な地
ちりるを柳しるもおしんくのうらわたり落葉も柳

らるねのねしんれ
ねと過わり

萩

一夏色のるる二焼糸二流
萩二懐氏とてふ一

但秋の代葉 已上二也秋一葉なをのるる一ちり
一可焼

よりせきるとつめ萩のうれうれとすれいをわたり
惣別 名草のうらわをわたりそれと花のうらわと

むすくも萩わたり萩すもはわたりあまじす
はわたりも萩萩の葉わたり

うりたり萩乃わりのせのう萩とよりり大萩
萩の萩のうらわれと萩の萩のわらわら

と名別まてうら萩と代葉一又う萩わらわら
うの代葉よりうら萩と代葉一又う萩わらわら

又萩のゆい又まてとんこり但萩のわらわら
つら萩二のゆい萩わら萩もまよとらわら

薄

一萩二萩二萩の
ちりわらわら

ちりわらわらとわらわらわらわらわらわらわら
わらわらわらわらわらわらわらわらわらわら

はらわらわらわらわらわらわらわらわらわら
の二ひらわらわらわらわらわらわらわらわら

結ん可力萩わらわらわらわらわらわらわらわら
ららわらわらわらわらわらわらわらわらわら

従事花とてさしてらんれのもままらうわしひうて
可然ちり供う宵今たり今に二あるたりるよ
むすびてらんれのもまの店らむのもまらうのら
一河あるたりらん二あるうありしとむらり
灯 三二物燈一 法灯と云伝法人の名人と云
法灯一 かりとまんのとりしひのしとま
法のとめうるむなり共つぬめとありひたまの伝の
赤の灯のしとまのりあて赤灯炬燵か向宿坊の法
灯あしとまよ 三二燈二月松 月ひらり松
うけかちり 獨 かりとま一 ひらりくの
店かとの懸いかりひらりの店と
ひらりの店とつふうらちり

一燈四句物

わら けふ世のさしにせ物の言の意別くしとま
四句物言の言も用之ふかま言も不可ぬまや
あま言りしとま言の照はてうしよ月たりや
今にふたり不可ぬまや或富士の言伝またり
又同又をぬぬ式加春言も高四句たり
似物言もあまよ似地の言も不可ぬまを巴の流こ
又をぬぬ式う宵今やあまの言もま言た
る下しとま伝まの言一河とつふ半くあまの言
とすれらるたりあしのらん言れとまたりとま
るよちりしとま言月のりらよとてたの言ふ
つらりとりとま言の言の言たり今にらん言を
かり流のらるふ言言はまの言も似のらんり
似物の言の 三三明 各四言たよ一 あまうら言
もと屋ちり ちの言一 今たり

乃字 可のわらひと云 夕月夕花わら

のり 可のわらひと云 夕月夕花わら

のり 可のわらひと云 夕月夕花わら

のり 可のわらひと云 夕月夕花わら

のり 可のわらひと云 夕月夕花わら

のり 可のわらひと云 夕月夕花わら

のり 可のわらひと云 夕月夕花わら

のり 可のわらひと云 夕月夕花わら

のり 可のわらひと云 夕月夕花わら

のり 可のわらひと云 夕月夕花わら

のり 可のわらひと云 夕月夕花わら

のり 可のわらひと云 夕月夕花わら

のり 可のわらひと云 夕月夕花わら

のり 可のわらひと云 夕月夕花わら

火 可のわらひと云 夕月夕花わら

玉字 可のわらひと云 夕月夕花わら

のり 可のわらひと云 夕月夕花わら

のり 可のわらひと云 夕月夕花わら

のり 可のわらひと云 夕月夕花わら

のり 可のわらひと云 夕月夕花わら

のり 可のわらひと云 夕月夕花わら

のり 可のわらひと云 夕月夕花わら

のり 可のわらひと云 夕月夕花わら

のり 可のわらひと云 夕月夕花わら

のり 可のわらひと云 夕月夕花わら

まるごとくあつたりぬしとていへりしちりていりりの
 半なりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
 の下よめておしおしとちりきりきりきりきりきり
 うけりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
 くりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
 もまよのふきりきりきりきりきりきりきり

可嫌亦越物

付可嫌同懐帛之物

岩屋

岩屋は二句なり名おとも月岩二の内より
 屋まふ字のいふ句もまふへこたを

隠家

森ひも

栖

住れも

住居

山居処に

居およ田の宿

二句の宿代
 宿ぬちり

居の字は二句なり
 居およ田の宿の字はなり門田といひ居
 におよちなり門の百額よめいひしりなり

居およに村お方離

りあ一けちちしくのち
 居およのちちち二句なり

濱底

或後よ依句

可嫌居おこ

大略居およ
 ちちちち

りのままた
 ちちちちのちちちのちちちのちちちのちちちのちちち
 ひちちちのちちちのちちちのちちちのちちちのちちち
 ちちちのちちちのちちちのちちちのちちちのちちち
 ひちちちのちちちのちちちのちちちのちちちのちちち

ら海のら... 白土... 加...
二句

居... 可... 二句

... 二句

... 二句

... 二句

... 二句

... 二句

し福の... 思烟

... 二句

... 二句

... 二句

... 二句

... 二句

... 二句

此時漢人歸家と云ふ一唐人踏方と云ふと書
 或るは天年のうらの踏方の義もそらうくと云
 えて仁家礼智信のふふ字と種冊より記して
 とんくよとくらしし仁の字よとくくつとあり
 由らも此より踏布と云ふ義の字に詠礼の字端
 智の字よ布信の字よ信常と云ふふ義も
 年より又おかしき此時踏方の義よ六位以下
 人終を引ううていつく新三年のくく地人よ
 末字うそつうまうく地百代まで延暦十四年
 の四月よ結とつりてうくひくくくくえ月端
 ありといふ義もゆるる義も大慈會といふも
 小慈會といふもいふくく地と云ふは
 大慈會といふは神地と云ふは月弁の作すくく
 地と云ふは神地といふは神地といふは
 つとめ地のりれと云ふは地の上のれと云ふ
 作すくく地と云ふは神地といふは神地
 のよりくく地と云ふは神地といふは神地
 まうくくく偏頗の思よと云ふは神地といふは神地
 の義もともくく地と云ふは神地といふは神地
 徳よありありのゆい竹川と云ふは神地といふは神地
 うれと云ふは神地といふは神地といふは神地
 今のせんやせんといふは神地といふは神地
 とありくたり深成地と云ふは神地といふは神地
 わるれくく地と云ふは神地といふは神地
 ありありのくく地と云ふは神地といふは神地
 一なりといふは神地といふは神地

分りなき時之記

時分と時
 ありありのくく地と云ふは神地といふは神地

株 ニウチ 人傷るもさう人傷るわ
株 ニウチ 株 ニウチ 株 ニウチ

浮 ニウチ 浮 ニウチ 浮 ニウチ 浮 ニウチ

下 ニウチ 下 ニウチ 下 ニウチ 下 ニウチ

竹 ニウチ 竹 ニウチ 竹 ニウチ 竹 ニウチ

松 ニウチ 松 ニウチ 松 ニウチ 松 ニウチ

松 ニウチ 松 ニウチ 松 ニウチ 松 ニウチ

松 ニウチ 松 ニウチ 松 ニウチ 松 ニウチ

松 ニウチ 松 ニウチ 松 ニウチ 松 ニウチ

松 ニウチ 松 ニウチ 松 ニウチ 松 ニウチ

松 ニウチ 松 ニウチ 松 ニウチ 松 ニウチ

松 ニウチ 松 ニウチ 松 ニウチ 松 ニウチ

松 ニウチ 松 ニウチ 松 ニウチ 松 ニウチ

松 ニウチ 松 ニウチ 松 ニウチ 松 ニウチ

松 ニウチ 松 ニウチ 松 ニウチ 松 ニウチ

松 ニウチ 松 ニウチ 松 ニウチ 松 ニウチ

松 ニウチ 松 ニウチ 松 ニウチ 松 ニウチ

松 ニウチ 松 ニウチ 松 ニウチ 松 ニウチ

二句 菟苜

けりても今の下りなり打紙うぬ

なり わやしらかりさのふとさふあじり

し のまに身とわか

い のまに身とわか

い のまに身とわか

い のまに身とわか

い のまに身とわか

い のまに身とわか

い のまに身とわか

い のまに身とわか

い のまに身とわか

い のまに身とわか

い のまに身とわか

い のまに身とわか

い のまに身とわか

い のまに身とわか

い のまに身とわか

い のまに身とわか

けりても今の下りなり打紙うぬ

わやしらかりさのふとさふあじり

のまに身とわか

のまに身とわか

のまに身とわか

のまに身とわか

のまに身とわか

のまに身とわか

のまに身とわか

のまに身とわか

のまに身とわか

のまに身とわか

のまに身とわか

のまに身とわか

のまに身とわか

のまに身とわか

のまに身とわか

のまに身とわか

うりておぼくす、異敵とあらうきけ侍て後六井の
 絶宣は合戦万ぬの人とあらぬ救生舎ありて
 とあらうらり毎午一徳圃は半あり救世のむりこ
 うく一二年寂勝と御本を子流水只早池魚の
 一うり行らるるまきしたけ生候はれ外おしり
 ひめ御いあうるへ一延久二年一りのりきり
 雅也くまう一六府卿下借奉す半一の成り早
 思よのりれと神興らとこれありあそ此のりきり
 候式にしてるおのりきりとて、然る候冠のりて
 海ひ目よりあやこれより引くて還すのわりと海
 神人法昨らうらりまて自村とけりきり
 うらぬららりまてまのり候式たりり
 にお教ありて世路よはれにもくは白骨と
 かりて御本よりあらぬり世のありと候あ

ふ神あゝの 驛の 三約と二可 三層はと
 候とたあさ一 三 替をさ 二句居あ
 急きらとて大内一りららのんかかへ茶屋の
 ぞちらととめてすまきとてつひかへ田
 舎へ下人のまらりあしとてとら
 かりそれよりとらるる
 三のんれ
 じけ 口 三約よむせは三の 飯別 此乃
 ちのよ向の事と世路の飯あり
 らにのわいんの事 ちんといひ
 ちんといひはのちのわいんあひす
 一しらのことわいん半とていそ
 城の
 こんぬわし
 名あひ打紙 忠心のう
 可極也

ふおわしつふふい

ふもふふ可ぬふ紙
ふもふふふのふもふふ

うららそあつあつふふふも思ふもふふふ

懐しのふ
ふてあめ

ふふふふふふふふふふ

ふふお紙煙之

ふふふふふ

二句ふふ紙煙よ
不嫌之

温日と長閑

日のあつううといふふふも思ふもふふふ

涼よ冷字よ冷字ふふふふふ

あつううふふふふふふふふふ

あつううふふふふふふふふふ

古よあつ指よ末

あつうう
字も二句

松の子目

うららそあつあつふふふも思ふもふふふ
の目とらふふふふふふふふふ
とて松よひふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ
子目とふふふふふふふふ
半たりふふふふふふふふ
かりてふふふふふふふふ
直ふふふふふふふふふ
引てふふふふふふふふ
落物おひふふふふふ

くくふのふと軟とくすのの序と名年意盛とくわ
清原え猶若孫好忠わとつあ人ちとをいして作
音よおる郷音 せしひとふ喜ねのさる若川
わーの喜ねの詩の喜ねの海わとつあ人の詩
つげん二句たり以上二句もふとつあ人
りたよ

まら秋乃書

ウの時ふよ年の書の新しうたれ
とつ二句たり書とつあ人字より入句と

樵まよあれ字

あまうた
人偏入

借よ

新よ
これの
うけも

おもしけよ二句たり詩よりとつあ人もこの下まの
一あれとの詩よりとつあ人も新ある様たり

新よ詩

詩よりとつあ人も新ある様たり
新よ詩よりとつあ人も新ある様たり

おもしろく二句入目の詩よりとつあ人もこの下まの
新いふ様とつあ人も新ある様たり

石場

まをよんらり

二句よりよ
あまうた

袖あ

又洞

恋のまをわとつあ人もこの下まの
まをよんらり

洞よ袖のあ

川あしひの

わのよ洞

多歎のわとつあ人もこの下まの
別の味とつあ人もこの下まの

人乃

二句たり

別よ

恋のわとつあ人もこの下まの
日中も

二句入恋の句の洞
味とつあ人もこの下まの

え

まら秋乃書

為恋のわとつあ人もこの下まの
可憐はも

つあまら

おもしろく二句入目の詩よりとつあ人もこの下まの
新いふ様とつあ人も新ある様たり

わのよ洞

多歎のわとつあ人もこの下まの
別の味とつあ人もこの下まの

おもしろく二句入目の詩よりとつあ人もこの下まの
新いふ様とつあ人も新ある様たり

只のいしをくちあふの字わら場をわたり

ぬね

供のぬち切の打紙まき

ていこうふお大略とらんぬんあのおいとしらんぬち

とまり打紙わしりあつらぬんこたをれあも

乃一文字

別一なり

松まーかとの松まのー文字を編て

るなよ

わりのな

すん巴付き

のふの日弓矢

弓なり月年の矢

弓は築あ二弓張月は弓折年の築あ矢折弓なり

月三日月ののやうはゆいことなりあつた

築あ並ク又よ言乃字

ク又ク又

めいあよ二句タ

めくれお時ふある

改選二字入袖中
抄み子の名

如き鳥の鳴よけり

下よ空

あまに中を 淡路よまじ
も二句

山後とよひては ありらひあやかりありし時とよひ
あや可嬌き ても國の名よ付し時にしても水邊

けても 晨明よま乃字 の字あり 入 あや可嬌

相よ入字交字 黄泉 秋乃よま

凡それくして用半可わぬ和方き 秋の春松
くせよ秋可嬌 の春松

ひくまれの秋なり 秋とつりてても凡松を
あらの秋竹のそよこたしと凡のむらたし

二句なりわいわいともいふもわかれとにさうく
よあはれはる徳の家養わしと凡とつよは秋のかけ

くくわくとよ秋よけくあけたりくせよ秋とり
そのまよじてもあらしとつよ秋よありあけ

秋をよまよそく 角らん 楮拍み

秋可嬌 かけまのりくちけささるな
とれあいのりいせわり

齡乃凡そら 甲午お年まの字

長教の七年半より 八十代人かよの秋も嬌うの
不嬌き せいのあまよも秋の目算よ

みそよそねとんくろり不嬌年の二年甲午は年
二句よあひほりまじりまよの秋二句を二年

と軍八十カしと可極朽十 魂よ玉乃字

の字むらりて二もわらんを あまのついでにわらひて 玉乃字ありみ句極し あまのついでに

ついでにわらひて二句ありわらひて 玉乃字ありみ句極し あまのついでに

よ見 目あり 玉乃字ありみ句極し あまのついでに

あまのついでに 玉乃字ありみ句極し あまのついでに

不可為夜分 物なりふまのけり字田字 あまのついでに

あまのついでに 玉乃字ありみ句極し あまのついでに

名の字妙の字

よなりひ 二句あり すくわによ玄の字

らんれ 二句あり 玄字 付句極之お紙ふ

知よ物乃 二句あり 志 若し由名定之

あ 二句あり わらひ 二句あり

玉乃字 可極之云二句あり けり 二句あり

かきとわしくいひいつれ いひつ

ハニ句 いひつれみくわくといひつれ いひつれ

なりとわらむわづれ なり

とわらふ 如け詞 二字つゝ なり

なり 付句 嫌し なり

成乃ま 成字 不嫌 なり

よ 但可 依句 なり

ちと ちと ちと なり

人 人 ちと なり

是 是 ちと なり

但可 但可 依句 なり

生 生 死 なり

齢 齢 老 なり

わ わ ちと なり

いひつ

と と ちと なり

奇 奇 ちと なり

道 道 ちと なり

偽 偽 ちと なり

二 二 ちと なり

大 大 ちと なり

二 二 ちと なり

多分の年一りの律子よりわたりそとひあつら
つゝなり老母ねひのうらひとわたりと若かり

翁おきな老親おきなよ子よこ
以上付句たよ二句之迷懐
可懐おきな

文字余半
可相ぬ余めり及新紙可有封酌
を凡て用文字余半可紙く由

見和旁 二句懐えあつらうけうの下の 妻を
抄矣 の句と宗長等用之字余半と云く

蝶ちょう子こ目め咲さきねえねえじうじうふ古ふるねかり

帆ほと知ち系けいふふねえねえねねとうと比ひ世せ世せ汗あせ
ねえねえの世を
比下述懐の世を

ねえねえ一いち座ざめめ句く 大だい女にょををとと後ご世せ
ねえねえの世を
比下述懐の世を

ねえねえ一いち座ざめめ句く 只ただののねえねえめめめめ句く
只のねえめめ句
之世をねえのね

ねえねえ一いち座ざめめ句く 已い上じやう如じゆ此こ敷し ねえねえまま
已上如此敷 ねえま
可懐司折 屋や

ねえねえ一いち座ざめめ句く 祢ね免えんとと園えんわわをを
いふわつらまゝ作として家の
流りりまゝ一むちなり

ねえねえ一いち座ざめめ句く 以上可 一いち座ざ四し句く
以上可 一座四句
猶同面 ねの字

ねえねえ一いち座ざめめ句く 共とも力ちからをを季き子こ若わかれれ
共力を季子若
可懐同折 ねの字

ねえねえ一いち座ざめめ句く ねえねえ一いち座ざめめ句く ねえねえ一いち座ざめめ句く
ねえ一句の物の
可懐同折

ねえねえ一いち座ざめめ句く ねえねえ一いち座ざめめ句く ねえねえ一いち座ざめめ句く
ねえ一句の物の
可懐同折

ねえねえ一いち座ざめめ句く ねえねえ一いち座ざめめ句く ねえねえ一いち座ざめめ句く
ねえ一句の物の
可懐同折

ねえねえ一いち座ざめめ句く ねえねえ一いち座ざめめ句く ねえねえ一いち座ざめめ句く
ねえ一句の物の
可懐同折

ねえねえ一いち座ざめめ句く ねえねえ一いち座ざめめ句く ねえねえ一いち座ざめめ句く
ねえ一句の物の
可懐同折

わろくさるの門なりすのる母ありて母すて人
又ありをよむなりすのる母ありて母すて人
向人傳なりすのる母ありて母すて人
ゆんぐは娘物也 **恋世**と**速懐**は

在

替可

一層ありの物とさるるなりすのる母ありて母すて人

法なりとの **一文字**

大切し律一とく替可也

可折増然不用之

一文字ありてひしりとのなり

二三の字

三字 **仰** **名** **事**

西姫 公好し

わろくさるの門なりすのる母ありて母すて人

わろくさるの門なりすのる母ありて母すて人

わろくさるの門なりすのる母ありて母すて人

わろくさるの門なりすのる母ありて母すて人

わろくさるの門なりすのる母ありて母すて人

老 **与** **向** **娘**

わろくさるの門なりすのる母ありて母すて人

わろくさるの門なりすのる母ありて母すて人

わろくさるの門なりすのる母ありて母すて人

わろくさるの門なりすのる母ありて母すて人

わろくさるの門なりすのる母ありて母すて人

可 **替** **同** **折** **不** **能** **者** **字** **言** **わ** **ら** **る**

居るなりとの詠に朽燼なり只雪なり
わらびのわらびなりあまのあまのあまの
山と与る

可燼 山と二ふの百句よ一なりわらびとつふ
日形 名はよの二句をみりをもむる可也
志

砂よる岩 可燼 白砂なり
日形 砂ももえ 篠と

志乃 日形 一のく行しあむと行
もみり志のくすくともみり
竹

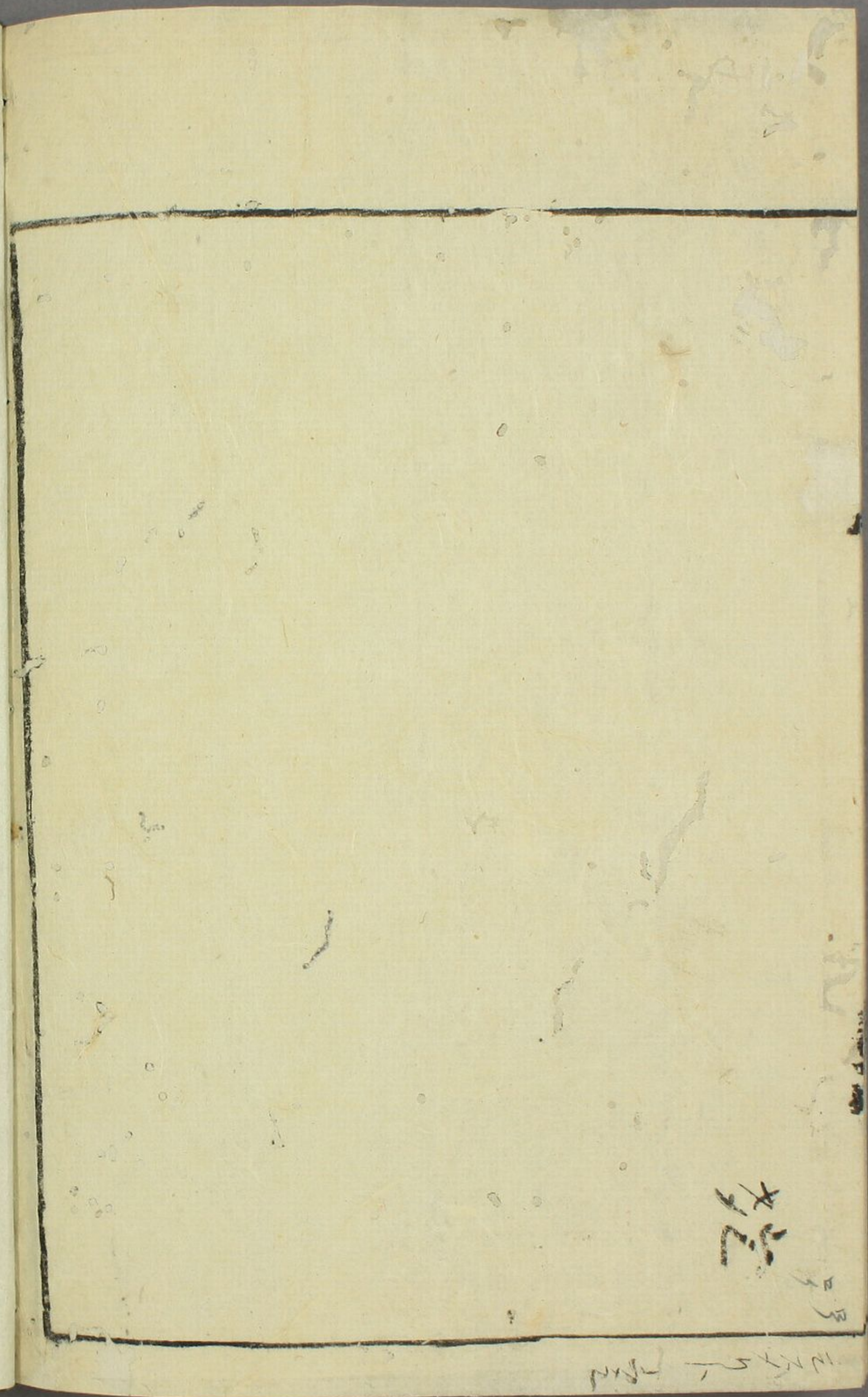
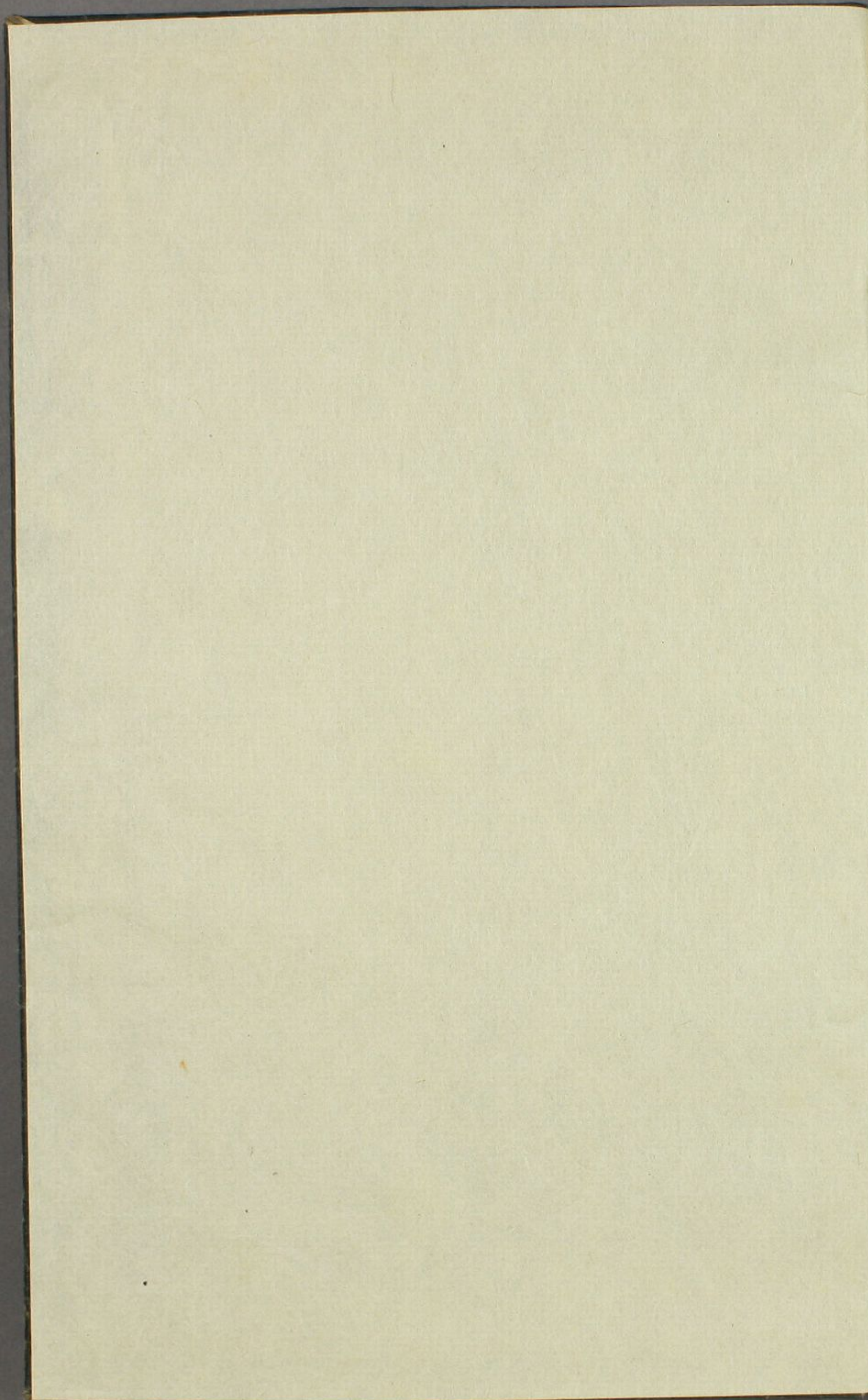
とすく 可燼 神字の神樂
日形 可燼 日也

九室と都 可燼 都と大文
日形 日也

日あかり 大妻なりとこの味下なり
日あかりの味下なりよもくこの味下なり

わらびのわらびのわらびのわらびのわらびの
わらびのわらびのわらびのわらびのわらびの
ま城なりなりなりなり

と燼 一



定

三

